

(3)「生国魂(イクニタマ)神社」… 通称 ”いくたまさん” と呼ばれる

・”生国魂神社の勧請は詳ならず”とされているが、社伝によれば、「神武天皇御東征の砌、凶賊平定を御祈禱になったのに始り、その後、応神天皇の時、社殿を造営し、神事祭式が制定せられた。」とされ、摂津国石山碕(現在の大阪城付近)に鎮祭されたとされる。

祭神は、生国魂神と咲国魂神の2神。後に相殿神として大物主(オオモノヌシ)大神を祀る。

② 生国魂神は生島(イクシマ)大神、咲国魂神は足島(タルシマ)大神とも呼ばれ、国土・大地の守護神で、大地に生を受けるもの全てを守護される広大無辺の御神徳を有される。大物主大神は俗に”大国さま”と称され、人間生活萬般を守護される神様。

・天正年間に豊臣秀吉が大坂城築城にあたって、社領を寄進し、現在地(現・天王寺区生玉町)に社殿を造営して遷宮した。

かつては大坂城内に「生玉明神」の手水石・石燈籠・神木の松が残されていたというが、いずれも現存しない。



「生国魂神社御旅所跡」碑

・大坂城南広場に「生国魂神社御旅所跡」碑があり、説明版には次の通り記されている。

「生国魂神社の歴史を文献資料でたどると、『日本書紀』孝徳天皇即位前紀(645)に「生国魂神社の樹をきりたまふ」とあるのが初出で

あり、これは難波宮造営のためだと考えられている。また、「天文日記」(1436～54)の記載からも大坂(石山)本願寺に接して生国魂神社のあったことがわかる。

難波宮や大坂本願寺はこの大阪城の近くにあったことが知られており、生国魂神社が古くよりこのあたりに祀られていたことがわかる。その後、豊臣秀吉は大坂城の築城に際して天王寺区生玉町の現在地に移築した。当時大坂城大手門は生玉門と呼ばれたという。

この「お旅所」は昭和7年(1932)に新築されたものであり、夏祭の渡御祭に用いられた。」

・毎年7月12日の「生国魂祭(イクタマツリ)」では、神社をスタートして谷町筋を北上し大手通を大阪城に向う巡路によって”陸渡御”が行われている。

(4)徳川幕府による「大坂城」の再築

・元和6年(1620)、2代将軍・徳川秀忠により大坂城再築工事が開始され、3期に渡る工事を経て、3代将軍・家光の時に完成した。

工事開始にあたって秀忠は、普請総奉行に選ばれた藤堂高虎に、豊臣色を払拭するため「石垣を旧城の2倍に、堀の深さも2倍に」と強調したという。

築城工事のうち、堀の掘削や石垣の構築は西国と北陸の諸大名64家が幕府の命を受けて担当し、建物の建設は幕府の直営で行われた。

・元和6年から始まる第1期工事では、東・北・西の外堀の構築と西の丸などの建物、寛永元年(1624)から始まる第2期工事では、内堀の構築と本丸御殿など、さらに寛永5年(1628)から始まる第3期工事では南外堀の構築と二の丸南部の建物の建設が行われた。

第2期工事で建設された天守建物は、寛永3年(1626)の竣工で、外観5層・内部6階、高さ58、5mに達した。

・工事は、全体に高さ約1メートルから10メートルの盛り土をし、その上により高く石垣が積まれたため、豊臣大坂城の遺構は地中に埋もれてしまった。

天守はその高さも総床面積も豊臣氏のそれを越える規模のものが構築されたが、城郭の大きさは豊臣時代の4分の1の規模に縮小されている。…本丸、二の丸の規模はほぼ同じ

・築城工事を命ぜられた大名には、石高に応じて分担する石垣の長さを割り当てられ、決められた工事担当区域(=「丁場」)ごとにその出来栄を競い合った。大坂城の石垣には、各大名が自分の担当丁場を誇示するかのようには家紋などを刻印した例が多く見られる。

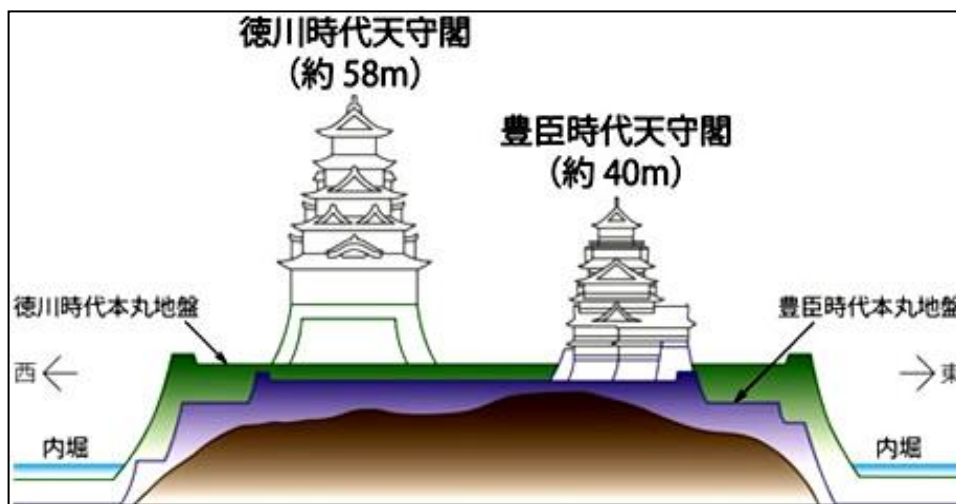
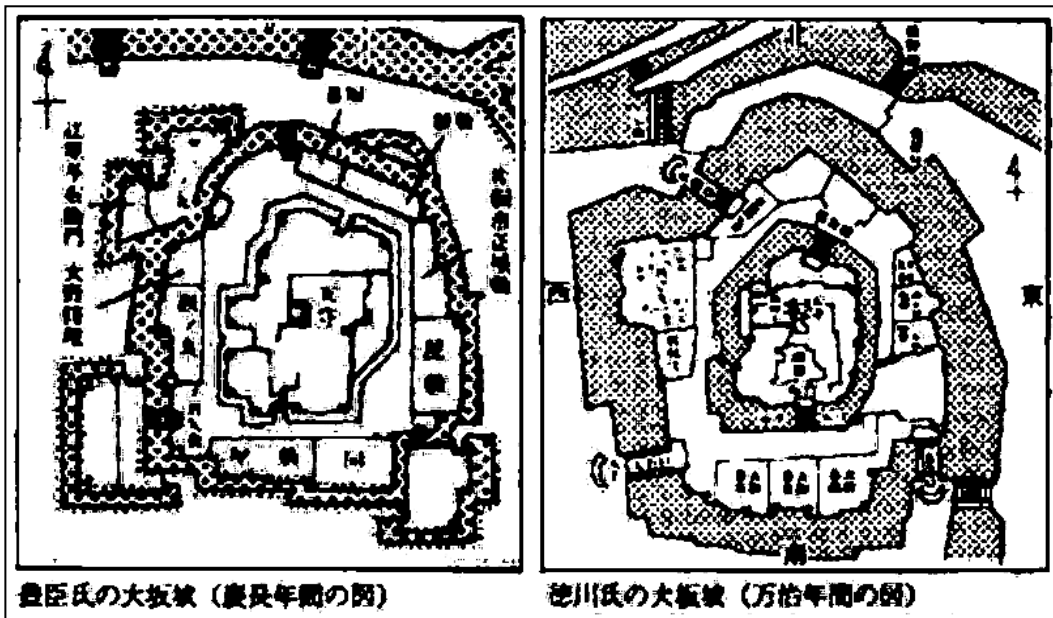
大坂城は、石垣の規模が格段に大きいだけでなく、堅くて良質の花崗岩からなり、しかも要所には、比類のない巨石が多く使われている城として抜きん出た存在である。

築城に使われた石は、廃城となった伏見城をはじめ、加茂(京都府)や六甲からも運ばれたが、特に小豆島など瀬戸内海の島々は良質の花崗岩の産地として、多くの石が切りだされ、海路、大坂まで運ばれた。これらの島にはせつかく切り出されたものの大坂まで運ばれず

に残された石が、「残念石」として保存されている所がある。また、今も大阪城内北側には運ばれてきたものの使われずに放置された家紋入の石が積み残されている(刻印石広場)。

② 大坂城の天下普請は、その普請を諸藩に課すことによって藩の財政を逼迫させ、財政的にその勢力を削ぐことと大坂人に恩義を持たせる。といった徳川幕府のネライがあったとされている。

・このようにして寛永6年(1629)に完成した大坂城については、天守を含めてその後の数度にわたる復元工事が当時の絵図等を基に進められてきたため、一部手を加えられた箇所もあるが、現在の大坂城がほぼ再築当時の姿・規模を引き継いでいる。(なお、現在、内堀の一部は水が抜かれているが、その姿はほぼ変わっていない。)



・再築された徳川大坂城は幕府直轄の城であり、城主は徳川將軍家の歴代將軍自身であったが、3代將軍・家光が訪れた後、幕末動乱のさなかに14代・家茂が入城するまでの230年間、城主不在であり、普段は譜代大名から選ばれた大坂城代が預かっていた。

この間、三度の落雷で大きな被害にあっている。最初は、万治3年(1660)城内青屋口の火薬庫に落雷して大爆発が起きたもので、後に石造りの火薬庫(焰硝石蔵)が建造された。二度目は、寛文5年(1665)、天守北側の鯨に落雷して大天守は竣工後わずか39年目で焼失し、以後昭和の復興まで266年間、大坂城には天守がなかった。そして三度目が、天明3年(1783)の落雷で、この時には城の玄関である大手多聞櫓が焼失している。

こうした災害による損壊に対し幕府は、天保14年(1843)に大坂・兵庫・西宮・堺の町人らから155万両を超す御用金を集め、これを資金に大手多聞櫓の再建をはじめ天守を除く城内すべての建物の大修復工事を行った。

- ・14代将軍・家茂が長州征伐の最中に大坂城中で病没し、後を継いだ15代将軍・慶喜は幕府崩壊までの1年余り大坂城と二条城を舞台に諸外国の代表との会見などで活躍した。しかし、慶応4年(1868)、幕府軍が鳥羽伏見の戦いに敗れると、慶喜は大坂城を脱出して江戸へ逃げ戻っており、その混乱の中で本丸台所付近などから出火したため、城内の建造物はほとんどが焼失してしまった

(5) 明治以降の大坂城

- ・明治以降、大坂城跡は陸軍の軍用地として整備され、維新の大火で焼け残った櫓や城門・焰硝蔵・金蔵などもすべて実用に供された。本丸内にも軍用建物が建て込んで、市民や一般人の城内への出入りは禁止されており、明治時代の京橋口筋金門には「大阪砲兵工廠・砲兵第二方面本署」の表札が掲げられ、それ以上、中へは入れなかった。陸軍軍用地時代の有様については、後述する項で説明することとする。

(6) 昭和の天守閣復興と平成の大修理

- ・昭和3年(1928)、大阪市長・関一が天守閣復興を提案。議会の賛同を得て推進委員会が設置されると、復興を願っていた市民から寄付の申し込みが殺到し、わずか半年で目標額150万円(現在の約750億円に相当)に達した。

- ・復興天守閣は、永久的なモニュメントとするため、当時としては最新の建築工法である鉄骨鉄筋コンクリート造りとされ、工事は昭和5年から始められて、昭和6年(1931)11月に歴史上3代目の大坂城天守閣が竣工した。「大坂夏の陣図屏風」にある豊臣時代の天守閣を模したもので、海拔33.3mの本丸に13.3mの石垣が組み、その上に高さ39.8m・5層8階建ての天守閣が聳えている。屋根の鯨や勾欄下の伏虎など、いたるところに黄金の装飾が施されており、平成9年(1997)9月、国の「登録有形文化財」に指定された。



改修前

改修後

- ・昭和20年(1945)の空襲では、京橋口多聞をはじめ、二番・三番・伏見・坤の4櫓などが焼失した。終戦後、大坂城地も3年近く米軍に占領されていたが、返還されて以来、大阪市により市民のための大坂城公園整備の努力が続けられ、破損した石垣や昭和25年(1950)のジェーン台風で甚大な被害を受けた城内の古建造物の修復などが行われた。
- ・復興天守閣も60数年の歳月を経て老朽化が進んだため、平成7年から9年(1995~1997)にかけて大規模な改修工事が行われた。屋根瓦の葺替えをはじめ外部の耐久化工事と内部の改修工事が行われ、天守・破風部分が白壁になるとともに小天守西側サイドに身障者用エレベーターが設置された。また、天守閣の4階には、秀吉が作らせた組み立て式の「黄金の茶室」が、原寸大で復元されて黄金の茶器とともに展示されている。
- ・なお、昭和34年(1959)の「大坂城総合学術調査」により、金蔵・東の地下7mに“謎の石垣”が発見され、その後の研究・調査によって、現在の本丸の地下深くに豊臣時代の石垣が埋もれていることが分かった。(現在も発掘調査中で、現場保存して常設公開を検討中。)

⑨ 寛文5年(1665)から昭和6年(1931)11月まで大坂城には天守閣がなかった。従って、弥次・喜多や森の石松が八軒家から見上げた城には天守閣が見えなかったはずである。

『東海道中膝栗毛』第8編(大阪見物)＝文化6年(1809)森の石松＝生年不詳～万延元年(1860)

(7) 大坂城公園内の施設

- ・天守閣を中心として外濠に囲まれた地域とその外縁部については、大阪市が、まず大正13年(1924)に、外濠に接する追手口(大手口)前周辺の陸軍用地を借用して、「大手前公園」を設け、その後、關市長のもとで整備が進められ、昭和6年(1931)11月に天守再建に併せて本丸を含む9.6haが「大坂城公園」として開園された。
- ・大坂城は、終戦とともに占領軍に占拠されたが、昭和23年8月に占領軍が撤退し、荒廃した天守閣も翌年7月に再開された。大阪市は昭和28年に市民の募金協力も得て、損傷され

た櫓や石垣の修理を行い、陸軍が占めていた国有地が市の管理に移されて30年6月には「大阪城跡」が特別史跡に指定された。

天守閣のほか大手門、千貫櫓など13棟の重要文化財(昭和28年に指定)や西の丸庭園、豊国神社、梅林などが含まれる。

13棟の重要文化財 … *大手門(寛永5年創建→嘉永元年改築) *多聞櫓(嘉永元年)
 *塀三棟(嘉永元年) *千貫櫓(元和6年) *乾櫓(元和6年) *焰硝蔵(貞亨2年)
 *六番櫓(寛永5年) *一番櫓(寛永5年) *桜門(明治20年再建=本丸への正門。)
 *金蔵(寛延4年築造→天保8年改築) *金明水井戸屋形(寛永3年)

城内の巨石(ベスト5)

①蛸石	5.5X11.7m・59.43m ²	桜門枅形	備前・犬島	備前・池田忠雄	36畳敷
②肥後石	5.5X14.0m・54.17m ²	京橋口枅形	讃岐・小豆島	備前・池田忠雄	33畳敷
③袖振石	4.2X13.5m・53.85m ²	桜門枅形	備前・犬島	備前・池田忠雄	33畳敷
④大手目付石	5.1X11.0m・47.98m ²	大手口枅形	讃岐・小豆島	肥後・加藤忠広	29畳敷
⑤大手二番石	5.3 X 8.0m・37.90m ²	大手口枅形	讃岐・小豆島	肥後・加藤忠広	23畳敷

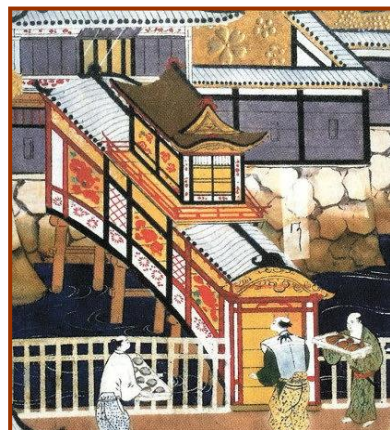
大坂城の石積みに使われた巨石は全て花崗岩であり、瀬戸内の島々から運ばれた。筑前・黒田藩の記録によると、海岸までは、主に修羅(太さ4~5寸の硬い木を格子状に組んだもの)を使い、下に丸太を置いて引っ張った。そして、海路は、大きな筏を組んでその下に石を綱で吊り下げて運ばれた。筏の廻りには多くの空き樽などをうかべて浮力を利用したとされる。

○「豊国神社」… もと大坂城二の丸南曲輪 大阪城2-1

- ・「豊臣秀吉公」「豊臣秀頼公」「豊臣秀長卿」を御祭神とする神社。
- ・明治元年(1868)、明治天皇が大阪へ行幸された際、“国家のために多大なる功労を残した豊臣秀吉公を大阪の清らかな地に奉祀するよう。”との仰せがあり、明治6年に京都の阿弥陀ヶ峯に社殿が造営され、大阪には明治13年(1880)、別格官幣社・豊国神社の別社として、中之島字山崎の鼻(現在の中央公会堂の地点)に創立された。
- ・大正元年に府立図書館の西方の公園内に移転したが、昭和36年1月、大阪市庁舎増築にあたって、御祭神に最も縁が深く、奉祀するのに最適な神域とされる大阪城内(二の丸南曲輪)へ奉遷された。(神社由緒より)
- ・平成19年4月、鳥居前に像高3.2mの豊臣秀吉公銅像が再建されている。もともと秀吉公の銅像は明治36年に大阪城内に建立され、後に中之島の旧豊国神社境内地に移されていたが、昭和18年に戦争により供出されて姿を消していた。今回、旧像の写真を元に大きさを踏襲し、一部修正を加えて復元されたものである。
- ・なお、境内社として「白玉神社」と「若永神社」(どちらも祭神は宇迦御魂神)が祀られている。このうち「若永神社」はもと大川町・淀屋橋南詰の淀屋の屋敷神であったが、御堂筋拡張に伴い、昭和2年(1927)に豊国神社境内へ遷座したものである。

○「極楽橋」

- ・本丸の北側、山里丸と二の丸を結ぶ内堀に架けられた全長54mの橋。
- ・豊臣時代もほぼ同じ位置に存在し、その橋名は“阿弥陀如来のいます御堂にいたる橋”という意味があったとされる。
- ・豊臣時代には屋根のある豪勢な屋形造りであったとされる。(石山本願寺時代にもやはりこのあたりに橋があり、本願寺のご本尊への通路に当たっていたとされる)
- ・徳川大坂城再建時の橋が明治維新の戊辰戦争で焼失し、今の橋は昭和40年に架けられた。
- ・秀吉没後、京都の豊国神社に極楽門として移築され、その後、家康によって竹生島に寄進され、現在、竹生島宝厳寺に遺る唐門(国宝)がそれであるとされている。
- ・表御殿の千畳敷と同じく、明からの使節を迎えるため慶長元年頃に造られたといわれ、ルイス・フロイスが書簡の中で、“黄金で輝く高貴な橋”と記している。



「豊臣期大坂図屏風」(部分)

2006年に、オーストリアのエッゲンベルク城で見つかった「豊臣期大坂図屏風」によって、その鮮やかな姿が再認識された。

○「西の丸庭園」

・大手門を入ったところの北側に広がる西の丸は、かつて秀吉の正室・北政所の屋敷があった場所とされており、昭和40年5月に整備されて総面積約64千平方メートルの芝生庭園として開園した。園内には約300本のサクラが植えられ、桜の名所としても知られる。園の東北隅には、昭和40年に松下幸之助氏から寄贈された茶室「豊松庵」があり、中央奥に、平成3年(1995)の「APEC大阪」開催時に休憩所として建造された「大阪迎賓館」がある。
・なお、明治以降、戦時中は陸軍の兵器補給廠・城内西兵器庫が置かれていた。戦後は、近畿管区警察学校に転用されていたが、昭和34年に堺市に移設された。

○旧「陸軍第4師団司令部庁舎」(現・「ミライザ大阪城」) 大阪城1

「陸軍第4師団司令部庁舎」

・明治21年(1888)4月、大日本帝国陸軍第4師団の司令部が本丸に設置された。もともと、その前身になる「大阪鎮台本営」も本丸に置かれ、明治18年に移築された和歌山城二の丸御殿の一部(紀州御殿)に入っていたが、第4師団創設以降も司令部は紀州御殿に入っていた。
・昭和6年(1931)の天守再建に併せて写真右の新庁舎が本丸の南東角に建設されて移転した。これは、大阪市が昭和御大典記念事業として本丸の公園化および天守再建を計画したことによる。



新庁舎は、3階建(一部4階)の褐色スクラッチタイル仕上で、欧州の古城を模した左右対称のロマネスク様式による重厚な建物として建造され、現在も当時の姿を残している。鉄道唱歌の中でも、「三府の一に位して 商業繁華の大阪市 豊太閤の築きたる 城に師団は置かれたり」と歌われている。
なお、司令部庁舎には、昭和15年より中部軍司令部が入っており、第4師団司令部は二の丸・南曲輪(現在の豊國神社鎮座地=もと「大阪衛戍刑務所」跡地)に移転した。

「大阪市警視庁」から「大阪市立博物館」へ

・終戦後は占領軍に接收され、司令部庁舎は昭和23年から昭和33年まで「大阪市警視庁」(のち大阪府警察本部)、昭和35年からは「大阪市立博物館」(現在の大阪歴史博物館)として使用された。
・GHQの指示で制定された旧警察法に基づき、昭和22年12月に大阪市の自治体警察として「大阪市警察局」が設置された。当初、その本部は大阪府庁内に置かれたが、手狭であったため、翌年に本部を大阪城公園内の旧・帝国陸軍の中部軍管区司令部庁舎に移転し、翌年9月には「大阪市警視庁」と改称された。
・その後、昭和30年7月に新警察法が制定されて自治体警察が廃止されることとなり、府下24市町村警察は統合されて「大阪府警察本部」が発足し、昭和34年2月に本部庁舎が現在地(馬場町交差点の北西角)に完成し、移転した。
・大阪市はそのあとの利用方法として郷土博物館・歴史博物館とすることに決め、昭和35年12月に開館したのが、「大阪市立博物館」である。

「ミライザ大阪城」

・「大阪市立博物館」は、新設された「大阪歴史博物館」の開館に伴って平成13年3月末で閉館し、以後未使用の状態となっていたが、大阪城を訪れる人たちの新たな賑わいづくりを目指し、平成29年10月にカフェ、レストランやショップが並ぶ新しい施設がオープンした。

○「市民の森」「記念樹の森」「砲兵工廠」あと

「砲兵工廠」「大阪陸軍造兵廠」

- ・明治維新後、日本に陸軍を創設した大村益次郎の建言によって、明治3年(1870)2月、幕府の長崎製鉄所の機械と技術者、職工を移設し、兵部省直営の「大阪造兵司」が設置され、同年4月に大坂城青屋口門内中仕切元番所を仮庁として事務が開始された。その後、陸軍省の発足とともに、「大砲製造所」と呼ばれ、明治12年(1879)からは「大阪砲兵工廠」の名で知られたが、昭和15年(1940)には陸軍兵器本部の設置に伴い「大阪陸軍造兵廠」と改称された。
- ・当初の敷地は、大坂城三の丸米蔵跡地(現:大阪城ホール、太陽の広場など)だけであったが、明治45年(1912)までに玉造口定番下屋敷跡地(現:記念樹の森、市民の森など)や京橋口定番下屋敷跡地(現:大阪ビジネスパーク)へ拡張され、昭和15年には城東錬兵場(現:JR西日本森ノ宮電車区、大阪市営地下鉄森之宮検車場、森ノ宮団地など)まで拡張された。昭和20年頃には最大で6万4千人の工員が従事していた。
- ・当時、アジア最大の規模を誇り、陸軍唯一の大口径火砲の製造拠点で、主に火砲・戦車や弾薬類を開発・製造しており、軍需だけでなく鋳鉄管や橋梁といった民需も受注していた。
- ・昭和20年8月14日のB-29の集中爆撃で、工廠は80%以上の施設が破壊されてその機能を失い、この空襲で砲兵工廠構内だけでも死者380人超と報告されている。
- ・戦後、焼跡地は不発弾が多く危険だという理由で、永く更地のまま放置され、その敷地から鉄くずを回収し生計を立てる「アパッチ族」と呼ばれる人々が集まり、バラック集落を作るまでになっていた。

「森林公園」として生まれ変わる。

- ・実は昭和27年頃から整地作業が始められたが、コンクリート壕や不発弾をとり除く作業は難航をきわめ、鉄骨をさらけ出した無残な姿をさらしていたが、昭和39年に中馬市長が緑化百年宣言を発し、42年度から万国博関連事業として杉山町の造兵廠焼け跡の整備事業に着手した。大坂城公園内の東外濠とJR環状線との間には、市民の植樹募金によって、約100種・9万本の樹木を植えて森林公園にすることとなり、昭和45年10月に「市民の森」として、ひとまずその形が整えられた。
- ・北側に造られた「記念樹の森」は、市民が結婚、入学、誕生…など人生の節々においてその記念となる樹を植えてきたもので、年々それらの木々が成長し、森を形成しつつある。JR環状線の東側は、大阪ビジネスパーク(OBP)、JR西日本森ノ宮電車区、大阪市交通局森之宮検車場などになっている。
- ・また、青屋口にあった明治6年竣工の大阪陸軍造兵廠旧本館は、昭和56年に解体されてその跡地に「大坂城ホール」が建てられ、玉造口付近にあった診療所(陸軍兵廠の附属病院)跡は、昭和21年5月に市立東市民病院となり、その後、「大阪市立身体障害者福祉センター」(現「大阪市立心身障がい者リハビリテーションセンター」=平野区)となっていたが、平成3年9月に、「大阪国際平和センター(ピースおおさか)」として生まれ変わった。

○「大坂城梅林」

- ・内濠の東側、約1.7haの広さに約100品種・1270本近くの梅が植えられている。
- ・この梅林は、大阪府立北野高校の卒業生(六稜同窓会)が開校百周年事業として、22品種・880本の梅を大阪市に寄付したことにより、昭和49年3月に開園した。

○「大阪市立修道館」

- ・昭和37年12月、大手門(桜門)の南西部に完成した柔道・剣道・なぎなた・弓道その他武道の錬成道場。当時の中井市長が”よく道を修め、身体を練り、魂を鍛えよ”と若人への期待と祈りを込めて、その名をつけた。
- ・戦時中は、「大阪陸軍兵器補給廠」(西側)とその「櫻門前兵器庫」が置かれており、戦後は「近畿管区警察学校」に転用されていたが、昭和34年7月の大坂城整備に際して近畿管区警察学校は堺市に移設された。(現在、西側に門柱と塀が残っている)



○「教育塔」

- ・昭和9年(1934)9月21日に関西を襲った室戸台風は大阪にも甚大な被害をもたらしたが、この惨害に対する教育者の犠牲的行為は社会に大いなる衝動を与え、殉職者の英霊を慰める声が期せずして起こった。これに対して、風水害による殉職者のみならず、広く教育者にして殉職した者及び犠牲学童を含めて合祀する慰霊塔の建立が決められ、全国学童並びに教育者の拠金と一般有志からの寄附によって、昭和11年10月、大阪城公園大手前広場に高さ約30mの「教育塔」が建立された。
- ・毎年10月30日(教育勅語が公布された日)に、前年からの殉職者が合葬されている。

○「大阪城ホール」(正式名称:「大阪城国際文化スポーツホール」)

- ・大阪城青屋口のほぼ正面、大阪砲兵工廠日本館跡に建設された多目的アリーナ(楕円形のドーム式)で、昭和58年(1983)10月1日、「大阪築城400年まつり(大阪城博覧会)」開催に合わせてオープンした。
- ・国際級室内陸上競技会が開催可能な規模のアリーナを有する施設では我が国初のもので、最大収容人数は16千人あり、競技会、コンサートのほか最近では大学の入学式や入社式など様々なイベントが開催されている。

○「ピースおおさか(大阪国際平和センター)」 大阪城2-1 中央大通沿い

- ・戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝えるため、平成3年(1991)9月に、大阪における戦禍の記録を保存・展示し、平和の情報発信基地として開館した。

○「大阪城音楽堂」 森ノ宮公園口を入った西側

- ・天王寺動物園にあった天王寺野外音楽堂の代替施設として、昭和57年(1982)5月に開場した野外音楽堂で、約3千人の収容能力がある。

○その他、大坂城内に置かれた主な陸軍関連施設

「大阪陸軍監獄署」

- ・明治5年(1872)、「大阪鎮台陸軍裁判所囚獄」として、現・豊国神社東部に開設され、その後、「大阪陸軍監獄署」、「大阪衛戍監獄」、「大阪衛戍刑務所」、「大阪陸軍刑務所」と改称されてきたが、昭和15年(1940)9月、東大阪市石切に移設された。

「大阪陸軍兵器補給廠」… 本廠は多聞櫓の東側にあった。

桜門前兵器庫、城内西兵器庫(西ノ丸)、城内北兵器庫、青屋口門兵器庫、玉造門兵器庫。

「大阪城南陸軍射撃場」

M30頃～

- ・昭和7年(1932)5月、南外濠の南側に陸軍歩兵部隊の小銃・機関銃実射射撃訓練場とし

て建設され、戦後は、陸上自衛隊に引き継がれて隊員の訓練などに供されていたが、昭和43年11月の大阪城公園整備に伴い撤去された。

「第四師団軍楽隊」

- ・明治21年(1888)3月、大手門に向う土橋の手前・北側(西外堀の外沿い)に配備された。
- ・大正12年(1923)に廃隊となったが、隊員有志により大阪市音楽隊が創立され、昭和21年6月には「大阪市音楽団」、平成26年からは一般社団法人「オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラ」(日本で最も長い歴史と伝統を誇る交響吹奏楽団)として現在も活躍している。

○その他(「お城のドン」)

現在は天守閣大門前の東側に移設されているが、もと小天守台の上に西向きに大砲が備え付けられていた。明治維新以来、大阪城地を占有していた当時の陸軍が、明治3年(1870)6月からこの大砲を使って毎日、朝・昼・夜の3度、空砲により、時報を打ち鳴らした。同7年7月からは正午のみとなったが、大阪市民にとって正午の時報の役割を果たすようになり、市民はこれを「お城のドン」とか「お午(ひる)のドン」と呼んで大いに重宝したという。

現在の「大阪城公園」案内図



- A=乾櫓 B=千貫櫓 C=多聞櫓 D=六番櫓 E=一番櫓
 イ=生国魂神社御旅所跡 ロ=石山本願寺推定地 ハ=蓮如上人袈裟懸けの松
 ニ=刻印石広場 ホ=砲兵工廠跡碑

